薬　事　日　報

口腔チェック結果共有を

薬剤師と歯科医師が連携

口腔ケア学会

第20回日本口腔ケア学会総会・学術大会が21日に都内で開かれ、薬剤師部会ワークショップでは、薬学的管理や薬剤師の観点で患者の口腔ケアに取り組む意義や、実際の取り組み事例などが紹介された。歯科衛生士の演者からは薬局薬剤師が活用できる簡易的な口腔スクリーニングが紹介された一方、薬剤師の演者からは、薬剤師と歯科医師間で服用中の薬剤や口腔チェックの結果を共有できる体制を構築する必要性が指摘された。

一番右が岩田氏、一番左が白石氏

歯科衛生士の白石愛氏（熊本リハビリテーション病院）は、サルコペニアと口腔問題、栄養障害には関連があり、病院で働く歯科以外の職種の約9割で患者の口腔状態に問題があると感じたことがあるとの実態を報告した。

口腔は職種により見る視点が異なるとし、口腔スクリーニングを行う際に口腔機能評価指標「ROAG」などを用いることの必要性を強調した。ROAGは、声、嚥下、口唇、舌、粘膜、歯肉、歯・義歯、唾液の8項目をそれぞれ1～3点で評価し、点数が高いほど患者の口腔機能が悪化していることを示す。

スコア化することで継続的にモニタリングが可能となる上、評価法が簡便で誰でも取り入れることができるため、白石氏は「多職種共通言語として活用できる。薬剤師には患者の服薬中の口腔管理に利用し、情報提供してほしい」と呼びかけた。

大学で研究を行いつつ、週1日薬剤師として働く岩田紘樹氏（慶應義塾大学薬学部医療薬学・社会連携センター）は、自身の勤務する附属薬局で実施する唾液による口腔内環境チェックや、地域住民対象の無料健康イベントでの関連する取り組みを紹介した。

昨年6～7月には、オーラルフレイル予防啓発イベントを開催し、オーラルフレイルに関する説明やセルフチェック、予防のためにできることなどの啓発を行った。

参加した50代以上の84人に対して行ったアンケートでは、69・0％がオーラルフレイルの名称を知らなかったと回答し、認知の低さが浮き彫りとなった。セルフチェックによると60代以上でオーラルフレイルの危険性が高い者の割合が高いことが分かった。

さらに、啓発イベントの2週間後に行ったアンケートによると、オーラルフレイル予防の口の体操の実施について、参加するまで体操を知らなかった人の50・0％で実施していることが分かった。また、歯科に相談経験のなかった人のうち80・3％で「相談した・相談しようと思っている」と回答があった。

薬剤師の取り組み報告を受け、フロアの歯科医師からは「薬剤師が口腔ケアに取り組んでいることを自院でも伝えていきたい」「歯科医師会などと連携して、歯科への受診勧奨をもっと進めてほしい」との声が上がった。

これに対し、岩田氏は「今後はトレーシングレポートを用いて、患者が服用中の薬剤や薬局で行った口腔チェックの結果を共有し、専門的なケアの必要性などの情報連携を確立していきたい」と話した。